

鈴木勁介先生をお送りして

岩本陽児 *IWAMOTO Yohji*

個性豊かな和光大学を体現した個性をまたひとつ、私たちは失ってしまった。

私の鈴木先生との出会いは、今から十年前、着任の年にさかのぼる。だが、同じ学部とはいえ隣の学科で、研究室は廊下の端と端。親しくお話する機会は、すぐにはやってこなかった。

ご縁を得たのが、鈴木先生の手稿の査読を依頼されたこと。今に続く和光大学の出版助成制度、第一号である。何しろ私は教員一年生、学長じきじきのご指名ということで発奮し、ほかの事を後回しにして査読コメントを完成させた。ワープロミスのひとつひとつまで、丁寧にチェックした。

その後、学長室に呼ばれて緊張していると、三橋学長から先生に紹介された。この時はじめてお話しした鈴木先生は、私のコメントのことを行き届いていると大そう喜ばれて、「これが査読というものです」との賛辞を頂戴した。その後、研究室を訪ねると、湯飲みを出されて、日本酒をなみなみと注がれた。まだ昼の日なかというのに。

後で知ったがこれは、お酒でなく「お水」というそう。和光に着任して初年度に経験した、カルチャーショックのひとつだった。

お通夜の席で、鈴木先生がもと編集者だったと聞かされた時には冷や汗ものだったが、ともあれ、こうして名著『新篇 岡上風土記稿』が出版され、地域に根ざすという和光大学の基本戦略のバイブルとなった。文科省の環境教育GP、町田・川崎の市立図書館との相互利用協定、公民館・児童館との連携など、この路線は豊かな成果を挙げつつある。さらに、現在進行中の町田市公民館および鶴川駅前に建設中の文化施設との連携も近々、形をなす事だろう。じかにお伝えできないのは悲しいことだが、墓前にご報告できる日を楽しみにしている。

「和光畑」の世話人として、忘れてはならないのが鈴木先生の「岡上農園」である。お通夜、葬儀にもノーエンズ卒業生が多数駆けつけてくれていた。

両者は今やふつうの姉妹団体だが、もし私が着任早々に岡上農園の存在を知っていたら、和光畑はなかったかもしれない。

2002年の春のことだ。学生寮の当時の寮長・副寮長の相談を受け、メーデー後の懇親会で職員諸兄に大いに勇気付けられて和光畑はスタートしたのだが、岡上農園を知っておれば、かちこちの地べたをわざわざ開墾はしなかった可能性が高い。とはいえ、宮野薫さん

の畑の一角を借りて慣行栽培を行う岡上農園と、キャンパス内において完全無農薬、有機栽培の和光畑は、学生の交流を保ちながら、それぞれの特徴を伸ばしていくのがよいと思っている。

岡上農園がいつごろ誕生したのかを正確にお尋ねしなかったことが悔やまれるが、学生運動の激しかった時代に、理屈ぬきに農民の労苦を実体験させることが必要との鈴木先生の判断はたいへん教育的で、人間の発達とは何かを考えさせられたものだ。

ばいであの授業に「氷頭なます^{ひす}」を持参されたこともあった。単なる知識ではなく五感を通じた学びを大切にしておられたのだと思う。

こういうこともあった。

その年の秋、はじめて「鮭のちゃんちゃん焼き」にご招待いただいた。鈴木ゼミ初期の卒業生が新聞社に入り、北海道勤務となったことで、まだ「ちゃんちゃん焼き」が今のようには知られていなかった頃からのゼミ名物と教わった。そのために、築地市場で買出しをするそうだ。この買出しも、初夏のカツオ、秋の鮭と、以来数十年続いていると言う。若い大学に伝統をつくり出した学生の力にも、圧倒される気分だった。

さて、時間にコンパ室に行くと、鈴木先生が「よく来てくれました、それではよろしく」と、いきなり出刃包丁を渡されて、私は目を白黒。お客さんのつもりが何と、お魚当番だったのだ。いったい何だったのだろう。とって私は、翌年のかつおコンパからは、いそいそと自前の出刃を持参するようになったのだが。

やっぱり気になって、三年も経ってから、どうしてまた？ と訳をお尋ねしたところ、「いや、岩本さんだったら魚を捌けるだろうと最初から思っていました」。どうして分かったのだろう。謎めいている。

葬儀からの帰りみち、学バスの中で非常勤講師の村山さんにそんな話をしていたら、主婦のしゃもじ渡しならぬ、鈴木先生からの「包丁伝授」だったのではと、民族学者ならではの指摘があった。おお、知らぬが仏。

黄色く、蠟人形のようになってしまう鈴木先生。ひつぎ一杯花で飾り、農園のピーマンやカラスウリも入れたまではいいとして、仕上げになんと、好物のお酒を5、6本も注がれて酒びたし。こういうことなら、G棟東に植え付け五年目にして今年初成りとなった「禅寺丸柿」をもいで来て、酔い覚まし用にお棺に納めるのだったと、そればかりがいささかの心残り。

みんな、泣いて笑って、こんな葬式見たことない。まさに和光らしいお別れであったと思う。棺のふたを閉めるとき、鈴木先生のまつ毛には、しずくが光っていた。

合掌